上:「テレビでドイツ語」では、毎月のテキストも執筆。
下:本学でも使用している教科書シリーズ。20年前から多くの大学で使われているロングセラー。現在も改訂作業中。

2

外国語教育研究センター
准教授
吉満 たか子
TAKAKO YOSHIMITSU

大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。同大学大学院ドイツ語専攻科修了。専門はドイツ語教育。学部在学中にロータリー財団奨学生として1年間ケルン大学に留学。大学院在学中にはミュンヘンのゲーテ・インスティトゥートの奨学金により、半年間のドイツ語教員養成講座を受ける。大阪ドイツ文化センター教育広報部勤務を経て、2005年に広島大学へ。NHK Eテレで放映された「テレビでドイツ語」の講師および番組監修を4シリーズにわたり務める。

外国語は知を広げ、つなぎ合わせる扉 授業を通じて語学習得の要因を探る

私の専門分野はドイツ語教育です。語学の習得にはさまざまな要因が影響します。影響要因は、外的要因と内的要因に分類できます。教材や教師、授業時間数、クラスサイズやクラスの雰囲気などは外的な要因です。これに対して内的要因には、学習者の年齢や母語、学習への動機、そして例えば大学生がドイツ語を学ぶ場合には小・中・高校での英語学習経験やそこで得た学習観(学びへの信念や態度)、学習習慣などがあります。これらの要因を、授業実践を通して分析し、授業では何をどのように教えるのがベストなのかを探るのが私の研究です。

「ドイツ語を教えています」と言うと、「大学時代はドイツ語で苦労しました」とか「der, des, dem, den(=ドイツ語の男性名詞に付く定冠詞)しか覚えていません」とよく言われます。私もドイツ語を習得するために多くの時間とエネルギーを必要としたので、そう言う気持ちはよく理解できます。が、それではちょっともったいない。外国語を学ぶことは、単にその言語が使えるようになるだけではありません。その言語が話されている国の文化や歴史、社会に関するあらゆる知識、ドイツ語ではLandeskunde(ランデスクンデ)と言いますが、それを学ぶことも言語学習には不可欠です。また外国語を学ぶことで、普段は意識していない日本語や日本の文化・社会について考えることも自然と起こります。つまり外国語を学ぶことというのは、それを発端に「知」をさまざまな方向へ広げ、「知」と「知」を有機的につなぎ合わせるという作業の繰り返しなのです。このような作業を通して得られた知識は、それぞれの専門領域の勉学や実生活に直接役立つこともありますが、往々にしてずっと後の思わぬ時に役立つことも多いのです。また、知識はたとえそれが実利をもたらさなかったとしても、楽しみをもたらし、人生を豊かにしてくれるものなのです。

ヨーロッパ諸国では「母語+2つの外国語」を中等教育から学ぶことがスタンダードです。日本では、小・中・高校で英語は学びますが、もう一つの外国語を学ぶのは大学に入学してからというのが一般的です。広島大学ではドイツ語だけでなく、フランス語・中国語・韓国語・スペイン語・ロシア語・アラビア語の7言語を初修外国語として学ぶことができます。また、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語・スペイン語は「トライリンガル養成特定プログラム」で2年次以降も継続して学習することが可能です。広島大学を志望する高校生の皆さんにも、ぜひ外国語学習の楽しみと「知」が広がる喜びを経験してもらい、豊かな人生を送るための基礎を作ってもらいたいと思います。